

目的 被服設計で行う人体の直接計測は、通常立位正常姿勢である。この状態では、時間の経過にともない当然人体のゆれ現象が生じる。大内・若井らは、立位で頸部のゆれ(ゆるぎ)は、20秒で $1/6$ と報告されている。このことから立位で実測する場合、測定的位置、脚部の力の入れ方によつて、ゆれを最少限にとどめることが可能であるか、これらの基礎資料を得るため検討した。

方法 実験資料：被検者は、健康な女子学生10名、服装は競泳用水着を着用させ、裸足。  
測定：基準線は、前後正中線、バスト、ウエスト、ヒップラインの各位と、左右体側など。  
計測点は、頭頂点、左右肩先点、耳珠点、オトガイ点の計4点である。足部は、①日本人の体格調査報告書の位置、②踵を離した状態で2方法、③セクションボードの前に測定タテ所にセンサーをセットした測定盤を置き、被検者とその上に正常姿勢で立たせ、前面、右側面から、ROTARY SHUTTER CAMERAでビデオ撮影するとともに足底圧を計った。

結果 姿勢保持は、平衡性の優劣に大きな影響を受けるし、また個人差も大きいことを前提として、今回の実験から次の結果が得られた。即ち、各部位において前後、左右とも20秒の経過時では殆んどゆれは認められなかった。被検者により差はあったが、1分経過からゆれ現象がみられ、ゆれ幅は頭頂が大きく足底にいく程小さかった。足底圧は、踵とけい側中足点の両位置の変化が大きく、ひ足中足点と第1指中節骨の変化は小さかった。